

死について

死は、多くの人をもっとも恐れるもので、人によっては戦争中だろうが平時だろうが、一生その恐怖につきまといわれる。

この戦争で 100 日近くも死にさらされ、何度も決定的な死を免れてきた私たちは今や、死の秘密について語れるようになった。これは謎の地下室に大切に隠されていた、誰も知らない秘密。この秘密を共有するために、死をめぐる私たちの心理が、戦争が始まってからどう変化してきたかを話したい。

例えば戦争の始めの頃、近くでミサイルの音がしたら、闇雲に走って逃げ惑ったし、恐怖のあまりおかしい行動をとった。布団を頭まで被ったり、歩くときに少し前かがみになったり。それで身を守っているつもりだったのだ。しばらくすると恐怖は薄れ、お互いの反射的な行動をからかうようになった。さらに時が経ち、あまりに何度も周りにミサイルが落ちたので、私たちはミサイルが落ちたら何が起きるのかを分析するようになり、ミサイルや轟音への恐怖は薄らいでいった。

私たちが実体験から得た経験則、皆が気づいた最も大事な教訓はこう

だ：ミサイルの音を聞いたり、窓ガラスが割れるのを見たり、自分や自分の家の上に石が降ってくるのを見た人間は、つまりまだ生きているということ。新たに生きる時間をもらったということだ。なので、私たちはミサイルの音を耳にするや否や、「無事で何より、神に感謝、今回は当たらなかった！」と言い合うようになった。

そしてミサイルの音を聞いていない、聞こえていない人間は、殉死者や負傷者だということだ。致命傷や重傷を負った人は、ほとんどが何も感じなかったと言う。例えばある人はこう話した。「紅茶を飲んでいたが、目が覚めたら病院にいて、母さんが側で泣いていた。何で泣いてるのかわからなかった。」この人は両腕や両脚を切断したのかもしれない。それか頭やお腹に砲弾が当たったのかもしれない。

致命傷とはつまり、その周りにいた人間が死んだという意味だ。ミサイルの犠牲になった人は、何も感じないまま、永遠の眠りについたのであるかもしれない。寝ている間に家が空爆されたら、そのまま帰って来ないのだから。

アクサー・インティファーダ(第2次インティファーダ)の頃、作家・文化人・芸術家で連れ立って血液バンクに行き、負傷者のために献血をしたこと

があった。私はそれを思い出し、2 か月前、親戚のために献血に行った。間隔を空けるため、6 か月以内は献血できない。と言っても、2 か月前のその時、私は病院の血液科で献血を申し出て、ベッドに座っていたのだが…気付いたら床に仰向けになって、両足を上げられ、顔に水をかけられていた。気を失っていたのだ。友人いわく、私は 3 分近く意識がなく、もう 1 分続いたら、死んでいたかもしれなかった。もしそうなら、私もただ眠ったまま旅立っていただろう。

死は生きている人間の問題だ。誰かが死ぬと、生き残ったその家族や友人が苦しむ。記憶の中で永遠に生き続ける人もいれば、埋葬が終わったら死ぬ、つまり忘れ去られる人もいるだろう。いずれにせよ、死が残酷なのは生きているからだ。

皆さんの安全と、この狂った戦争が止まることを願って。

2024 年 1 月 12 日

アリー・アブー・ヤースィーン

(翻訳: 渡辺真帆)

原文(アラビア語):

https://www.gazamonologues.com/_files/ugd/07c7f7_d10ff8ec685f4891bc68ba406d30b06.pdf